

題

ミーニシの頃

山下孝行

あらすじ

沖繩に暮らす初老の夫婦が妻のコロナ感
染入院で、たった一人マンションですご
す秋の夜長の寂しさに幼少期港町で暮ら
す韓国人の少年や少女と過ごした水彩画
のような想い出がよみがえってきた。

登場人物

下山太吉 65歳 11歳 主人公

下山雅子 65歳 太吉の妻

救急隊員 2名

回想登場人物

朴道松 11歳 太吉の幼馴染で親友

金城玉子 11歳 太吉の恋人

金城兼一 37歳 玉子の父

金城陽子 35歳 玉子の母で韓国人で

ある兼一と結婚した日本人

下山清志 39歳 太吉の父

下山綾子 40歳 太吉の母

下山泰次 12歳 田吉お兄

朴道也 41歳 道松の父で朝鮮部落

の部落長

持田健一 11歳 太吉の友達

持田道子 5歳 兼一の妹

持田敏子 38歳 兼一と道子の母親で
病弱

浅田真常 65歳 弘誓寺（ぐぜえじ）
の住職で町内会長

浅田美佐子 58歳 和尚さんの妻で弘誓
寺の一切の切り盛りをこなしている

島田武一 10歳 太吉より「学年下だ
が頭が切れて太吉たちの参謀

佐々木源蔵 41歳 佐々木古金商店の主
人

佐々木美幸 11歳 佐々木古金商店の娘
で太吉たちの同級生

尾崎花 65歳 尾崎商店の主人太吉
たち子供らのたまり場となる駄菓子店

飯塚弘 52歳 飯塚商店の主人太吉
と同じ部落

斎藤修 44歳 漁師で太吉の隣に住
む独身の気のいいおやじ

松月堂のおやじとしてのみの登場（姿は
ない）

魚市場の人々

朝鮮部落の人々

朝鮮部落の子供たち

○下山太吉自宅マンション（朝）

下山太吉（65歳）先に起きた太吉リビングでテレビを見ている。

妻下山雅子（67歳）様態がすぐれないのか、時折りせき込みながら寝室から起きてきた。

太吉「遅いな、どうかした」

雅子「うん、昨日から喉がおかしいの」

太吉「熱あるのか」

雅子「うん、38・5度」

雅子はしんどいのか、ソファに崩れるように座り込んだ。

太吉「そうか、コロナかもしれないね」

太吉は雅子に基礎疾患があることを思い

出した。

太吉「そう言えば、糖尿病持ってたよね」

雅子「うん」

太吉「救急車呼ぼう」

雅子「お願いするわ」

太吉は救急車に連絡した。

雅子の容態について詳しく聞かれたが、もともと病院勤めが長かったこともありその点の要領は良かった。消防署の分室が自宅近くだったこともあり、5分もかからず救急車は到着した。太吉と救急隊員話している。

救急隊員「市民病院の発熱外来につながりますので、旦那さんも濃厚接触者ですので、入院準備して来てください」

太吉「わかりました準備出来次第向かいます」

○沖縄市民病院

携帯電話で話している雅子。

雅子「やっぱりコロナだったわね」

太吉「俺の方は陰性で10日間の自宅待機です
んですけど」

雅子「そうそう、入院の準備ありがとう」

太吉「そうか、足りないものがあつたら連絡
くれ」

○沖縄市民病院の外（夜）

太吉は雅子の入院準備を預けて、病院の

外から電話をした。

電話し終わると、することもなくしばらく呆然と病院の建物をながめた。

雅子と再婚してからは、一人ですごくすこともなかった。

夜が更けていくにつれて、寂しさに感傷的になっていた。

太吉はもともと秋は好きな季節ではあった。幼いころ友と遊んだ野山の思い出。

沖縄ではその年はじめて吹く北風を（ミーニシ）と呼ぶ。

ミーニシの頃になると、待つ女たちは愛する人が帰ってくることに心躍らせる。

太吉は寂しさのためか、涙が自然とほほをつたっていた。

忘れかけていた幼いころの思い出が、湧き上がってきた。

サシバがミーニシに乗って秋空に和を書いている。

「ミーニシの頃」の題が挿入。

○太吉の子供の頃に回想

○幼い頃の太吉の家

幼い下山太吉（11歳）の家は、クラスでも2番目に家が遠かった。

太吉が通る道には、朝鮮の人達が当時戦争をのがれて、日本にやってきたその一部の10家族ほどが山と海の間へのびた道の脇の崖肌へへばりつくように棟続きの長屋を作っていた。

朝鮮の子供たちは、太吉たち日本人にいつも敵対していた。

太吉遅い昼飯を食べていた

そこへ泥だらけで擦り傷だらけの兄下山泰次（12歳）べそをかきながら立っている。

太吉「やっちゃんチョンにやられたんか」

泰次「うん」

太吉はおやじ自慢のすりこ木棒を持って
家を飛び出した。

○朝鮮部落の奥の空き地

朝鮮部落の子供たち数人遊んでいる。

一対一で喧嘩らしきことをさせている。

リーダー格らしき子供 朴道松（11歳）

大声で掛け声を掛けている。

道松「そんなことで、日本人に勝てるか」

そこへ太吉がすりこ木をふりかざしてや

つてきた。

太吉「やっちゃんをやったのはどいつだ」

気が付いた道松太吉の前に遣って来る・

道松「おれだ」

太吉「へん、おめえか」

太吉は威張った言い方をした。

太吉「おめえひとりじゃ勝負できねえのか」

道松「みんなてえだすなよ」

太吉「さしで勝負か、おめえも見込みあるな

「あ

それから太吉と道松はくんずほぐれつで
なぐりあいの喧嘩が10分程続いた。

道松「おめえもなかなかだな」

太吉「おめえこそよ」

ふたりはへとへとなり広場に大の字に
なった。

さすがにそれ以上太吉に他の子どもが手
を出すことはなかった。

○朝鮮部落の入り口にある共同水飲み場
この水飲み場はまだ水道が通っていない
この部落の者たちの大切な場所であった。
太吉は身体についた泥を洗い流していた。

○太吉の家の中（夕）

父下山清志（39歳）、妻綾子（40歳）、
太吉夕飯を採っている。

太吉の顔はばんそうこうと赤チンが点々
と塗られている。

太吉「おっかあ、こう毎日ひものと明日葉の

三杯酔じゃねえ」

綾子「何言ってるのこの罰当たりが、三度三度のおまんまも食べれない家もあるんだよ」

清志は聞こえない風で明日葉の三杯酔を

肴に焼酎をちびちびやっていた。

太吉「決まってこれだからな、発育盛りなんだからいいもん食わせねえといつまでもち

びだよ、あああ貧乏人はやだねえ」

清志「ター坊、貧乏人じゃないぞただお金やテレビや洗濯機が不足しているだけだぞ」

太吉「それじゃあ、俺んちは貧乏人じゃなくて不足人かあ」

清志「そうじゃ不足人じゃあだから自分が満足すりゃ満足人よう」

太吉「それじゃ自分次第で不足人から満足人になるんかあ」

清志「そうじゃ、それよりおめえ赤や絆創膏って面白い顔してんなあ」

太吉「へへへ、ちよつとした出入りよ」

清志「それで、勝ったんか」

太吉「喧嘩は五分かなあ、でもダメージは与えた」

清志「ほうどんなダメージだ」

太吉、朝鮮部落の水飲み場で、放尿した話しをした。

清志、険しい表情で太吉の首を鷲づかみすると、外へ引きずった。

太吉はいつにない父親の形相にあばれるのをやめた。

太吉「おっとうなにすんだよう」

清志「おっかあ部落に行ってくる」

妻の綾子も黙ってうなづいた。

○朴部落長の家の前（夜）

朴道也（41歳）はこの部落長で朴道松の父親であった。

清志朴道也のいえを叩くと道也出てくる。

道也はおどろいたように。

道也「清志さんどうしたです」

清志は太吉が水飲み場を汚したことなど

を丁寧に説明した。

清志「朴さんすみません、今から掃除させてください」

道也「今からです」

清志「はい、今からです」

道也「道具水飲み場あるから使えるです」

清志「すみませんそれじゃお借りします」

○部落の共同水飲み場（夜）

清志と太吉は⁵時間ばかりかけて水飲み場の掃除を終えた。

清志湧口に柄杓をあて清水を汲むんで一口飲んだ。

清志それを太吉に渡す。

太吉も柄杓の水を飲んだ。

清志「ター坊、うんめえだろう」

太吉「うんめえ」

清志は掃除を終えると朴の家に向かった。

○朴部落長の家の前（夜）

清志朴の家の戸を叩く。

中から朴親子が現れる。

道松は太吉に右手を挙げて挨拶をした。

道松「よっ」

清志「朴さん今終わりましたんで」

道也「お疲れさんありがとうございます」

清志「今度は申し訳ないこととしてすみません

でした」

道也「ご苦労さんです」

清志「それじゃ失礼します」

道也「ありがとうございます」

○部落入り口

めずらしく部落の入り口には道松ひとり

だけだった。

太吉の顔はまだばんそうこうや赤チンの

ままだった。

太吉「おう」

道松「おうまだ痛むか」

道松少し言いたげにしてぐずぐずしてい

る。

道松「おつとうがよう日本人がみんな清志さんみたいだったらって話してたよ」

思わぬ話しに太吉はめんくらった。

太吉は黙って右手を差し出した。

それにこたえて道松もその手を握った。

それからと言うもの太吉と道松はいつも

一緒だった。

○部落の奥の空き地

太吉は道松との和解から学校帰りには、毎日のように部落によって帰るのが日課となっていた。

太吉は少しぐずぐずしながら。

太吉「みっちゃん俺よ玉子の下着姿見てえな

あ」

太吉の言う玉子とは金城玉子（11歳）のことである。

玉子は太吉や道松の同級生で吉永小百合よりもかわいいというぐらいで、太吉た

ち同級生のマドンナであった。

道松「あんたも好きでんなあ」

太吉「そりゃあ西海屋の旦那こればっかりは
やめられまへんなあ」

太吉は小指を立ててそのころはやった時

代劇ドラマの口真似を試みせた。

道松「でも今日はだめだよおつかあが家にい
るからよ」

太吉「わかったそれよりみっちゃんはらへら
ねえか」

道松「そうだな拾いに行くか」

太吉「それじゃ造船所がいいぜ」

道松「うんおっとうもそう言ってたよ」

太吉と道松は西の入り江の向こうにある
木造船の修理をする造船所に向かった。

○造船所の中

太吉と道松造船所の中を物色する。

拾った船釘や切れた銅線をリュックに詰
め込んだ。

太吉新品の銅線巻きを見つけた。

素早く太吉は道松に合図した。

太吉「みっちゃんあれ」

道松「ター坊あれはやばいよ」

道松新品の銅線巻きに尻込みした。

太吉「あれだったら焼きそば、コロッケ、ラ

ムネまで飲めてお釣りがくるぞ」

道松は太吉の誘惑に乗った。

道松「それでどうやって運ぶ」

太吉道松が承諾するものと決めていたの

か、頑丈な棒をすでに握っていた。

太吉「みっちゃん棒を通して両脇から二人で

持とう」

太吉説明しながらすでに新品の銅線巻き

に棒を通していた。

太吉「みっちゃんそっち持って、あとは走る

よ」

道松「ほいきた、やじさん」

本当にこの二人は時代劇が好きなのか今

度はやじさんきたさんになっていた。

太吉「あらよ、きたさん」

二人は銅線巻きを持ってひたすら走った。後ろでおとなの怒鳴る声が聞こえていた。15分ぐらい走っただろうか、いつのまにか二人は隣町まで来ていた。

道松「ター坊どこで買い取ってもらおう」

太吉「そうだなあいつもの佐藤じや買い取らねえなあ」

太吉のいう佐藤は佐藤古金商店のことで、朝鮮部落の人たちや子供たちのくず鉄をいつもいい値段で買い取ってもらっていた。

ただ佐藤の主人は生真面目な人で、新品の銅線巻きを持って行ったら買い取るところか、返すように言われるかもしれない。かかった。

太吉「そうなると佐々木だなあ」

佐々木というのこの町に2軒しかない古金商店のもう一つで、子供たちの間でも盗品でも買い取るが足元を見てケチだと

のうわさであった。

道松「やっぱり佐々木かあ」

太吉「そうなるなあ」

道松「でもケチらしいよ」

太吉「まあしょうがねえかあ」

どんなにケチでも最大の安全策を考える
と仕方のないことだった。

○佐々木古金商店の前

店の前で品物の整理をしている佐々木源

蔵（41歳）

太吉「おっちゃん買い取ってくれんか」

源蔵は二人が持っている新品の銅線巻く
に眼が行った。

源蔵「それもか」

源蔵は新品の銅線巻きを指さした。

太吉源蔵の前に背負っていたリュックサ

ックの中の船釘も開けた。

太吉「これもいっしょに」

源蔵値踏みしながら。

源蔵「この新品銅線巻きどうした」

太吉「どうしようとおやじに関係ねえだろう」

道松「倉庫の片付けしたら小遣い代わりにおやじが持っていけて」

太吉「それでいくらで買い取るかあ」

源蔵「そうさあな全部で200円ぐらいかな」

太吉「そりゃねえよ500円ぐらいはするぜ」

源蔵「いやならいいよ」

そこへ佐々木古金商店の娘で太吉や道松の同級生の佐々木美幸（11歳）が奥から出て来た。

美幸「お父さんそれはあんまりよ300円は出

さなくっちゃ、だいぶ冒険してみただし」

源蔵「お前がそういうなら300円だ」

太吉道松に目線を送り承諾した。

太吉「ああ300円じゃあいいよ」

○尾崎商店の中

佐々木古金商店の大通りから小学校への坂道の途中に尾崎商店があった。

子供たちは学校の帰り道よくかいぐいをする場所でもあった。

太吉「おばちゃん百円札くずしてちょうだい」

尾崎商店の主人尾崎花子（65歳）。

太吉花子に百円札を渡し50硬貨^①枚受け

取る」

太吉「みっちゃん山分けだ、今日はご苦労さん」

道松「今日は何時もよりどきどきしたなあ」

ちようどその時美幸がにこにこしながら

入って来た。

美幸「ねえ分け前だったら私も貰う権利ある

わよねえ」

そう言って道松に流し目を送った。

道松「そうだなあ美幸がいなかったら200円

のままだったかもな」

太吉「道松夫婦には負けました。∞人で分け

よう」

主人花子「あんた達なにすんの」

太吉「そうですねえ焼きそばコロッケ載せと

ラムネ」

道松「おれも同じもん」

美幸「私も以下同文」

焼きそば15円コロッケ5円ラムネが10円

だから太吉たちはまだ70円もの大金を持つていた。

太吉たちは運ばれてきたものをおいしそうにぱくついていた。

道松「そう言えばよモンちゃん警察につかまったらしいよ」

モンちゃんとは持田健一（11歳）の同級生のことである。

モンちゃんの家は父ちゃんが今年の夏のシケでやられていないし、母ちゃん体壊して寝てるし。

そのため太吉たちとは遊べなくなり毎日妹の持田道子（5歳）の面倒をみていた。

太吉「なんでつかまったんか」

道松「道子ちゃんがみかんの缶詰ほしって言ったから」

太吉「長屋で盗んだんか」

道松「うん長屋が警察に売った」

太吉「それで」

道松「母ちゃんが行けなくて、和尚さんと松

月堂のおやじさんが行った」

太吉「そりゃモンちゃんだいぶげんこつくら

ったろう」

道松「それがよ和尚さん帰り道で、なんで長

屋かあ松月堂で我慢しとけってさ」

太吉と美幸はひっくりかえって笑った。

太吉「それじゃ今からモンちゃんところに行こ

う」

美幸「おいしいもの買って行って慰労会しよ

う」

道松「そうだな」

三人は互いにお金を出し合い、ラムネと

袋菓子をも2袋に詰めた。

美幸「おばちゃんこれもね」

尾崎商店の花子も子供たちの話しが聞こ

えたのかもしれない泣きして目頭をおさえて

いた。

花子「これおばちゃんからモンちゃんにあげてね」

美幸「おばちゃんありがとう」

③袋のお菓子とラムネを持ってモンちゃんの家に向かった。

○持田健一の家の前(夕)

家の前で妹の道子を遊ばせている健一

道松「モンちゃんパーティーしよう」

美幸「道子ちゃんおいしいものいっぱい買ってきたよ」

道子うれしそうに美幸に手を引かれて家の中へ。

健一「ター坊どうしたんだ」

太吉「ちよつとした収入があつてよ、みんなで分け分けパーティーよ」

道松「ちよつとした収入よ気にすんな」

○持田健一の家の中(夕)

美幸は寝込んでいる母親持田敏子（38歳）

のところへ。

美幸「おばちゃん今日はみんなで来ちゃった」

敏子「すまないねえ私がこんなだからみんな

に迷惑かけて」

美幸「おばちゃん気にしないよ、モンちゃん

もよくやってるよ」

そんな会話をしているそばから、道松も

太吉も挨拶して座敷に戻った。

こんな時はやはり女のこの独壇場だった。

美幸が仕切って男の子たちはちゃぶ台を

しつらえたり、コップを並べたりとせわ

しなく動かされていた。

太吉「家でもこんなに動かねえのによ、みつ

ちゃん美幸貰ったら毎日尻にしかれるぞう」

道松「それでもいいんです、美幸の尻なら」

太吉「そこまでするか、こりやまいった」

美幸「あんたたちさっさと座って」

健一「そうだよ座れよ」

道子「ねえパーティーってどするの」

美幸「まずは乾杯しなくっちゃ、それから主催者挨拶でター坊とみっちゃん」

道松「美幸はいつするのか」

美幸「私は幹事挨拶で最後」

子供たちはモンちゃんのお父さんのこと

やスーパー長屋での万引きのことなど一

切触れなかった。

ただ面白おかしく大人の宴会の真似をしていた

○朝鮮部落の広場

太吉と朝鮮部落の子供たちがベーゴマに興じている。

道松「昨日はよかったな、モーちゃん泣いてたなあ」

太吉「ああ道子ちゃんあんなに喜んでたからなあ」

太吉急に思い出したようにてを打った。

太吉「みっちゃん忘れてたよ、玉子のこといっつがいいかあ」

道松「あんたも好きだねえ」

太吉「そりや男だからよう」

道松「今日はおつかあもいねえし玉子も家に
いるよ、今から行くかあ」

太吉「学校から帰ったばかりだから、うひひ
ですねえ」

太吉と道松ほかの朝鮮部落の子供たちを
残して、道松の家に急いだ。

道松「ター坊絶対大きな声出すなよ」

太吉「わかってまんがなあ」

○道松の家の中

太吉はじめて道松の家に入る。

自分たちも持っていないテレビやセパレ

ートステレオまであった。

太吉は朝鮮部落の人たちのしたたかさを
少し垣間見るようだった。

それでいて偉ぶることもなく平然と暮ら
すそんな部落の人たちが小気味よかった。

道松ぼかぁんとしている太吉をてまねき

した。

道松「ター坊その穴箸濡らしてあるからついでみな」

太吉濡らした箸の先でつついてみた。

太吉「見えた」

小声で道松に知らせた。

穴の先にまさに三つ編みでシミーズ姿の

玉子が鏡の前に立っていた。

太吉は心臓が破裂しそうなほどで頭がぼ

ーっとした。

玉子「きゃあ、道松かあ」

道松「違うよおおれじゃねえよう」

太吉「すいません太吉です」

玉子「待つときそっち行くから」

太吉「はい」

玉子玄関から入って来る。

玉子入って来るなり太吉と道松に正座させた。

玉子「ター坊のぞいたねえ」

太吉「なんだよう見たからって減るもんじゃ

ねえし」

玉子「なんで見た」

太吉「そりゃ美しいものはだれでもみてえし」

太吉は変な告白になっていることが気が

付かなかった。

へんてこな太吉の対応を見た道松。

道松「玉子様ごめんなさい」

玉子太吉の言葉に。

太吉も道松につられて。

太吉「玉子ごめんなあ」

玉子「みっちーター坊借りるよ今日のこととは

おばさんたちに内緒にしてあげる」

○玉子の家

そう言い残して、太吉の手をつかむと引

きずるように玉子の家に連れて行った。

家に入ると女の子のいる部屋なのだろう

隅々まで片付けられていた。

甘い香りがしたのは太吉の気のせいか。

玉子「ター坊玉子のこと好き」

玉子突然そしてはつきり聞いた。

太吉「ううん」

うなずくのがやっとなかった。

玉子「どんなところが好き」

太吉冷静さを失っていた。

太吉「少し気が強いけど、かわいくて優しい
し」

なんてことをいうんだ太吉。

玉子太吉の両頬にキスをした。

玉子「ター坊玉子捨てる怖いよ」

太吉もそうだと思った。

太吉「俺帰るよ」

玉子「明日から玉子のこと守ってよ」

太吉「わかってるって、まかすとけって」

○部落の広場

太吉帰り際道松の家を覗いた。

道松は居なかった。

道松は広場で子供たちのベーゴマに混ざ
っていた。

○帰り道（夕）

太吉道松に合図して帰った。

先ほどの玉子のキスした頬を触ってみた。

玉子の柔らかい唇の感触がまだあった。

夕日が顔にあたって太吉の真っ赤な顔も

見分けがつかなかった。

○ぐでえ寺の境内（朝）

太吉たち町内には、ぐでえ寺と呼ぶ寺がある。

ぐでえじが弘誓寺（ぐぜえじ）だと知ったのは太吉が大人になってからのことではあった。

境内は子供たちのたむろする場所となっていた。

境内は広くその先が大きな墓がみかん畑の下まで続いていた。

6月も中旬になると子供たちは落着きがなくなる。

太吉「みんな今年は2丁目と3丁目の奴らに遅れを取れねえぞ」

太吉みんなの前に立って櫛を飛ばしている。

子供たちが興奮しているのは、彼岸だからではない。

彼岸になるとそのころ墓へのお供えとして、菓子や果物が供えられる。

それが目当てである。

それを町内の子供たちで争奪するのである。

本当はお供え物は寺男が後から回収して、和尚さんが施設に寄付しているのだが。

島田武一（10歳）一つ後輩だが、頭の出来がいいのか太吉の知恵袋的存在だった。

武一「ター坊みんなの気持ちは上がってるよ、それより部隊編成をした方がいいんじゃないか」

太吉「部隊編成」

武一「偵察部隊と物を回収する部隊かな」

太吉「武一ちゃんはいつもいいこと言います

ねえ。それじゃ偵察隊部長みっちゃん、

回収部隊部長武一ちゃんそれでいいかな

あ」

道松「総大将はター坊だな」

太吉「それじゃ克己奮励努力してくれ。本部

は墓入り口の松田家の墓に置く」

道松「大将おかしいですぜえ、2丁目も3丁目
も見当たらねえです」

先の町内会の申し合わせで彼岸の子供た
ちの供物争奪戦禁止の回覧板が回ったこ
となど、2丁目の太吉たちの知る由もな
かった。

太吉「まいいや、怖気づいたんだろう引き続
きたのむ」

道松「了解」

しばらくして武一の回収部隊が数袋に分
けた戦利品を抱えて持ってきた。

子供たちうまそうに菓子を食べる。

太吉「やはり破れ饅頭は松月堂だなあ」

道松「蜜がのってカステラもうめえぞ」

武一「そうそう松月堂のカステラあれは一品
でしょう」

太吉「松月堂のカステラ食べたんかあ」

太吉の母親は太吉が悪さして迷惑を掛け
ると必ず松月堂のカステラを使い物にし
た。

太吉「俺なんかまだ食ったことねえよ俺んち
松月堂のお得意さんだけどなあ」

太吉しばらく休息の後立ち上がって。

太吉「それじゃ腹ごなしするかあ」

道松「なにするんだ」

太吉「この間ばあやんのところで千葉真一見
たんだ、かつこよかったぞう」

道松「俺も見た千葉真一かつこよかったよ」

太吉「そこでよ寺の縁の下に葺き替え互が眠
っています」

太吉は蟻地獄を捕まえによく本堂の下に
もぐっていた。

そこで葺き替え互を見つけたようである。

武一「えっ葺き替え互和尚さんに怒られるよ」

太吉「えー今日は彼岸ですねえ和尚さんは朝から大忙しですよ」

道松「そうか」

太吉「みっちゃん悪いけど玉子と部落の子供らにこの菓子届けてくれないか。俺たちは本堂の裏にいるからさ」

道松「いいよじゃちよっくらいって来るよ」

太吉は玉子のことと部落の子供らのことも忘れていなかった。

道松は大きな袋を2つ抱えて部落に急いだ。

太吉たち他の子供らは本堂のうらに向かった。

○本堂裏

本堂の裏に着くと太吉の指示で本堂の裏から互を数枚引き出してきた。

その一枚を太吉は置き石に立てかけた。

太吉「本物の瓦割をみしてやるからなあ」

太吉見よう見まねで空手のかたのようなものをして、足でかわらを思いつきり蹴った。

持田健一「ター坊すつげえよ」

他の子供たちもつられて、歓声をあげた。

太吉空手の型のまねをして見せた。

ちようどそこへ檀家周りから和尚さん（

浅田真常）（65歳）が帰って来た。

愛用のスクーターを本堂脇の駐車場に止める。

子供たちの騒がしい声につられて本堂の裏にやって来た。

他の子供たちは、和尚さんに気が付き一生懸命太吉に合図するのだが、背中を向けている太吉にはそれはわからなかった。しまいには子供たちもこらえきれず、蜘蛛の子を散らすように去って、太吉一人が残った。

和尚「なにしちよる」

太吉「いやちよつと」

和尚「黙って本堂についてこい」

太吉「へい」

うなだれておとなしく和尚さんの後に就いて行く。

○本堂内

和尚「仏さんの前で正座せえ」

そこへ部落に行っていた道松が戻ってきて、和尚さんに連れていかれる太吉を見て、心配で本堂に顔を出す。

和尚「おおいところに来た。道松市場に行つて太吉のおやじさん呼んできてくれるか」

道松「何て呼ぶんだあ」

和尚「ぐでえ寺の和尚が呼んできると言えばいい」

道松は坂を下った先にある魚市場に向かった。

○魚市場内

市場の中に人の塊がある。

市場仕事の終わった昼下がりに、将棋に興じていた。

その中に清志の姿があった。

道松「おじさん」

道松清志にてまねきした。

道松和尚さんが呼んでいることや太吉がしたことなども付け加えた。

清志と道松はぐでえ寺にいそいだ。

○ぐでえ寺本堂前

息を切らせながら清志と道松が来た。

清志「和尚さんまたター坊がしでかしましたか」

和尚「道松ご苦労さん、これ持って行け」

そう言っつて本堂にお供えされていたてバ

ナナの大きな房を持たせた。

和尚「道松は帰ってよろしい。キー坊お前た

ち親子は寺に恨みでもあるのか」

清志「和尚さん恨みだなんてめっそうもねえ。

いつもお寺には感謝してます」

和尚「親子二代で寺の互割りよって」

太吉は親子二代に反応した。

太吉「あのう和尚さん親子二代ってなんです

う

和尚「お前さんたち親子で寺の瓦を割ったん

じゃ

清志「和尚さんそんな昔のこと、勘弁してく

だせえよ

太吉「ええっおやじも」

和尚「そうじゃおまえのおやじはな、すずめ

のひなを獲ると言って本堂の屋根にのぼり

本堂の屋根瓦引っぺがして割りよったんじ

や

太吉と清志見合わせて仏さまに向かって

てを合わせていた。

和尚「しばらく反省しとれ」

そう言っって和尚さんは庫裏の方へ行っ

しまった。

清志と太吉一心不乱に仏様に向かって拝

んでいる。

しばらくして和尚さんが本堂へ戻ってくる。

二人の姿を見て。

和尚さん袋に果物やらお菓子やらを詰め

込んで持ってきた。

和尚さん清志の前に袋を置く。

和尚「キー坊それ持っていきなさい。今日は

「ご苦労様」

清志「和尚さんもう帰ってもいいんですか。

和尚「ああ悪たれ坊主を持ったおまえさんの

運命やな。ふおふおふお」

和尚さんの高笑いが本堂に響く。

清志「和尚さん他人事だと思って。そりゃね

えですよ」

和尚「そりゃ他人事だからいいんじゃないよ。こ

んな悪たれ坊主」

太吉「あもう、悪たれ悪たれと言ってますの

はぼくちゃんでしょうか」

清志「お前以外の悪たれが他にいるか」

太吉「そうかあ」

清志と太吉しびれた足をさすりながら和
尚さんにお詫びして本堂を後にした

○ぐでえ寺境内から続く坂道（夕）

清志と太吉坂道を降りて来る。

太吉「父ちゃんキー坊って呼ばれてたんだな

あ」

清志「ター坊悪さもいいが、責任は自分で取
らんといかんよ」

太吉「わかってるよキー坊」

坂道の向こうの天城山に連なる山並に夕

日が沈みかけている。

二人に夕日があたって二人の赤銅色の顔
に輝いている。

○太吉の家（朝）

母親の綾子が朝からせわしなく動き回っ
ている。

綾子「ほら、やっちゃんも太吉もさつさと起
きなさい。今日は恵比須講なんだから」

㊦(漁師町のこの辺では部落[㊦]ことに講と

呼ばれる集まりがある。

講とは貧しい部落の人たちの助け合いの

基本となっていた。)

太吉「ええっ今日は押し入れの中か」

泰次「今日ぐらえばあやんちはだめかあ」

綾子「向こうも赤ちゃんができて忙しいんだよ」

綾子奥の倉庫前にブリキの一斗缶カマドを据えて、飯炊きの準備を始めた。

それを見た太吉は。

太吉「母ちゃん今日はいくつ炊くのかあ」

綾子「一升だよ」

太吉釜を覗く。

太吉「母ちゃんこれ水多いぞう」

綾子「そんなことあるかい。おつとうの言つたとうりにしたんだけどねえ」

綾子は良家の末娘で漁師の清志の嫁にな

るまで家事一切やったことがなくたびたび問題を起こす。

太吉はそんな母親を危なっかしくもフオーローしていたというより父親からおまんなまのことだからときつく言われていた。

綾子「父ちゃんが五合炊くときは手のくるぶし
しって言うから、一升だから脚のくるぶし
使ったんだよ」

太吉「ええっ足で計ったのかあ」

綾子「そうだよ」

母親はさも機転の利く作業だとばかりに
していた。

太吉「おっかあ余計なことしたな、米たく水
加減は何合たこうが手のくるぶしか米を計
ったもので同量の水なんだよこれ常識だぞ
う」

そこへ漁から清志も帰ってきて、太吉の
報告を聞いた。

清志「そうかふおふおふお、そうかふおふお
ふおよく気が付いたなあ。よくやった」

太吉「へへん」

得意な太吉の横で母親の綾子は下を向いたままである。

綾子「そんなふうにはかにするんだったら。

あんたら二人で食事作ったらいいよ」

良家の末娘育ちの綾子はプライドが高く大人になりきれない風で、なかなかめんどくさいところがあった。

清志「それじゃター坊おっとうとごちそう作ろうか」

太吉「うん、じゃまがなくていいやあ」

○太吉の家台所

清志と太吉台所にかけてある専用の前掛けをつけて恵比須講のごちそうを作り始めた。

清志「ター坊みっちゃんから何か聞いてねえか」

太吉「なにを」

太吉はこの一週間ばかりは朝鮮部落には

行っていなかった。通りかかっても道松

も玉子も他の子供たちも出てこなかった。

太吉「そういえばみっちゃんも玉子も学校で

元気がなかったなあ」

清志「そうかやっぱり本当かなあ」

太吉「本当ってなんねえ」

清志「うーん、朝鮮部落の人達が北朝鮮に行

くかもしれねえっていうことさ」

太吉「なんで北に行くんだよ、部落のの人達

はみんな韓国から来たんじゃないかあ」

清志「そこんところがどうもわかんねえ」

太吉「そこまで聞くといえを飛び出し朝鮮

部落に向かっていた。

○朝鮮部落に続く道

太吉は泣きながら走っていた。

大好きな道松や玉子が遠くへ行ってしまう

うのが、たまらなかった。

○道松の家の前

太吉「みっちゃんいるかあ」

道松泣いていたのか眼を真っ赤にはらして出て来た。

太吉も道松の様子を見て泣き出した。

そこへ隣の家から玉子まで出てきてみんなで泣き出した。

わらわらと部落の子供たちが集まり泣き声の合唱になった。

ㄋ (在日朝鮮人の帰還事業とは195

0年代に始まった北朝鮮の集団移住運動だった。

推計三万九千人の朝鮮人が渡ったとされている。

大人たちの考えもあるが、子供たちの世界はまた別であった。))

ㄹ (北送事業で北朝鮮に向かう新潟港の情景。

紙テープの中大型客船の出航風景。))

○太吉の家（夜）

恵比須講の夜部落の人達が太吉の家に集まってきた。

去年までは部落の人たちもこの恵比須講には参加していた。

今年は誰も来なかった。

太吉と泰次押し入れの中に押し込められていた。

飯塚商店の飯塚洋（52歳）が朝鮮部落の話しを持ち出した。

飯塚洋「部落のもんはみんな行っちゃうのかねえ」

隣に住むたいせいのおばあのお息子独身の漁師齋藤修（44歳）しょんぼりとしてう

なづく。

齋藤修「せっかく仲良くなれたのによう」

清志「寂しくなるなあ」

綾子「そうだねえ」

いつもの恵比須講は歌や踊りとにぎやか

であったが、この日はなぜかしんみりと
していた。

○朝鮮部落の広場

部落の子供たちに混じって太吉、玉子、

道松の顔があった。

太吉「みっちゃんいくんかあ」

道松「うん、まだはつきりしねえんだ」

太吉「玉子んところはどうすんだあ」

玉子「家もまだはつきりしないの」

太吉「行くなよ、せつかく親友になれたのに

よう」

道松「俺も行きたくねえんだ」

玉子「玉子太吉のお嫁さんになるのに行けな

いよう」

普段考えたこともない国の違いをなんと
なく思い知らされたような気がした。

○太吉の家の前

玉子が玄関に立っていた。

太吉「玉子どうしたんだ」

玉子「ター坊あたしと逃げて」

太吉「どうしたんだあ」

そこまで言うとな玉子は泣き出してしまっ
た。

太吉も泣きたい気持ちをこらえて、玉子
の背中をさすっていた。

太吉「玉子逃げよう」

太吉逃げようとは言ってみたもの行く
当てがなかった。

○ぐでえ寺へ向かう道（夕）

太吉が一番に思いついたのが、ぐでえ寺
だった。

太吉「和尚さんに頼もう」

玉子の手をとると朝鮮部落の前を一目散
に駆け抜けて、ぐでえ寺の坂を駆け上が
った。

太吉「和尚さん、和尚さん」

和尚「だれじゃ」

太吉「俺だよ和尚さん、助けてくれよう」

和尚は玉子を見ておおよその察しはついていた。

朝鮮部落の北送事業の話は町内でも噂になっていた。

太吉「和尚さん頼むよ俺と玉子かくまってくれよう」

和尚「わかったわかった、庫裏に行つときな

さい」

太吉「ありがてえそうこなくつちやあ」

太吉は玉子の手を引いて庫裏に行った。

庫裏には和尚さんの奥さん浅田美佐子（

58歳）が夕飯の支度をしていた。

美佐子「あらあ、ター坊かわいい子連れてど

うしたの」

太吉「ちよつと、こいつと駆け落ちよ」

太吉でれながら背伸びした言い方をした。

玉子いつになく神妙にぴよこりと頭を下

げた。

本堂から戻った和尚さんは妻に耳打ちす

るとスクーターでて行った。

太吉と玉子奥さんから夕飯を貰っていた。そして和尚さんの戻るのを待っていた。

○玉子の家の中（夜）

和尚さんは玉子の父親金城兼一（37歳）

と妻陽子（35歳）を説得していた。

和尚「だからもつと子供たちのことも考えてくださいよ。兼一さんが落ち着いてから奥

さんと玉子を呼び寄せたらいいじゃないか」

兼一「おしよさん話しわかった。でも無理奥さん玉子連れて行きます」

隣の騒がしきで道松の父道也が顔を出した。

道也「おしよさん、私も何かも言ったよ」

和尚「それでこの部落から何家族が北に行くのか」

道也「三家族よ」

和尚「おまえさんとはどうするんだ」

道也「私のところ行かない」

和尚「そうかそうか、それでいつ行くのか」

陽子「寒くなる前だから10月末までに」

和尚はこれ以上説得しても無駄だと思っ
た。

部落の人達の住みにくさをどうにも出来
なかった、町内会長としての自分たちに
も非があると実感した。

和尚「どこから行くのか」

兼一「新潟港から行きます、北朝鮮行きの船
が準備している」

和尚「寂しくなるの、でも残る人達も幸せに
ならなくっちゃなあ」

道也「おしよさんありがとう」

○寺へ向かう帰り道（夜）

和尚さんは帰って太吉や玉子にどう説明
するか太吉の気性を考えると気が重かつ
た。

○ぐでえ寺の庫裏（夜）

太吉と玉子が夕食後のリンゴをつまんで
いるときに和尚さんが入って来た。

和尚「二人とも本堂に来なさい」

和尚さんの神妙な物言いに太吉も玉子も
察した。

和尚「玉子お前のうちに行ってきたよ。おま

えのおやじさん頑固やなあ」

玉子「だめだったのう」

太吉泣き出した玉子のせなかを擦って
いた。

和尚「今日は仏様の前で思う存分別れを惜し
みなさい」

太吉「うん」

和尚「太吉仏様の前とすることをくれぐれも
忘れんようになあ」

そこまで言うと和尚は庫裏の方に行って
しまった。

薄暗い蝋燭に灯された本堂には太吉と玉
子と仏様だけが残された。

二人は仏様に手を合わせて拝んだ。

太吉と玉子向かい合って、太吉は玉子を強く抱き寄せた。

こんなませた小学生でいいのだろうかと思いつつも、玉子は太吉の頬を抑えながちがちとぎこちないキスをした。

どきまぎしている太吉に玉子は頬にあてた手をそのまま首に回して太吉を抱き寄せた。

玉子「玉子ター坊が大好き」

太吉「玉子世界で一番好きだ」

二人とも泣きながら強く抱き合っていた。

ㄋ(大人じゃないのでこれ以上は期待しないように)

○東小学校太吉のクラス

帰りのホームルーム担任の田鶴恵子(34歳)と玉子が教壇に立っていた。

田鶴恵子「皆さんも知っている人もいるかもしれませんが、今月23日(日)に新潟へ行

きそして25日（火）に新潟港から北朝鮮へ
向かいます。そのため学校は今日までの投
稿となります」

事情の知らなかった女の子たちは突然の
ことに玉子に駆け寄り泣き出していた。
男の子たちは太吉以外あまり深刻ではな
かった。

○玉子の家

玉子の両親は忙しく移住生活の荷造りに
忙しかった。

太吉や道松玉子の家の手伝いをしていた。

太吉箆笥から玉子の下着を見つけそれを

道松に見せていた。

玉子「ター坊何してんのよ手伝いに来たんだ

か邪魔しに来たんだか」

兼一「太吉くん玉子と接吻したか」

母親陽子「何言ってるのそんなのとつくよね

え」

兼一「ほう、太吉くん手が早いねえ」

陽子「何言ってるの玉子の方がすすんでるの

よ」

兼一「そりゃかあちゃんと同じよ」

陽子「ばかだねえこどものまえで」

太吉「おじさんもおばさんに」

兼一黙ってうなずいた。

太吉は玉子が母親似だと確認した。

太吉「おじさん玉子はおばさんにだね」

兼一はまた黙ってうなずいた。

○同じ玉子の家（夜）

片付けられがらんとした玉子の家で3家

族の送別会が開かれた。

和尚さんに松月堂のおじさん、太吉の両

親など部落の人達に混じって町内の人達

も家に入りきれないほど集まっていた。

その中に太吉、道松、モンちゃん、美幸、

武一、モンちゃんの妹道子も一緒だった。

部落の子供たちに混じっていた。

太吉「25日かぁ、何時の電車なのか」

道松「新潟までだいぶかかる見たいだから午
前中の電車になるって」

太吉「みっちゃん玉子に聞いていてくれねえ
か」

道松「ああ聞いとくよ」

夜が更けるまで送別会は続いた。

○部落の広場

道松と太吉が広場で話している。

道松「25日の予定が天気都合で、23日の日

曜日になったそうだよ」

太吉「そうか早くなったんだなあ。それで何

時の電車なんだ」

道松「うん、朝9時って言ってたよ」

太吉「ようしみんなには知らせてあるかあ」

道松「ああみんな手分けして知らせてあるよ」

○伊東駅の登り2番線（朝）

三家族の登りを打ち立てて、三家族を前
に和尚さん松月堂のおじさん道松の父親

道也などが交代交代で挨拶を述べていた。

和尚「向こうはこれから寒いようだから身体に気を付けてくださいよ」

兼一「ありがとうございますお世話になりました」

部落長道也の音頭で。

道也「まんせー、まんせー、まんせー」

其れにつられて全員でまんせーの唱和になった。

太吉玉子の手をとりみんなと少し離れた場所で。

太吉「行くなよ、俺の嫁さんになるって言っただろう」

太吉こらえきれず泣き出していた。

玉子も泣いていた。

玉子「ター坊またいつか会えるから」

太吉今度は自分から玉子を抱き寄せた。

太吉「約束だぞいつか会えるよな」

玉子「うんかならず」

○部落の広場

玉子たち三家族が北に行って「週間ほどがたった。

気の抜けた太吉が青々として深い秋空を見上げている。

道松「ター坊玉子行っちゃたなあ」

太吉「ああ、また会えるかなあ」

道松「会えるさ気持ちがあればさあ」

○下山太吉自宅マンション（夕）

太吉「おい、退院はいつになるのかあ」

雅子「うん、検査が終わってからって言うって」

ㄣ（雅子は旧姓渋井雅子と言う日本に帰化したときに育ててくれた父母の苗字をもらいついでに名前まで変えてしまった。）

太吉は時折雅子のことを玉子と呼ぶとき

がある。

太吉きれい好きな雅子の退院の準備に合
わせて部屋の掃除をはじめた。

㊦ (太吉と玉子がどうして出会えたの

かはまた後日お話ししましょう。)

